

大学生活を振り返って (回想録)

松丸 国照*

他人事ではなく自分が現実に大学を退職する今、大学を振り返って自分の教育と研究は如何に努力し、発展させてきたのか此処に簡単に記す事にした。とは言えそれを端的には語れない。研究に時間を割き、学生諸君に学問を紐解いて日進月歩発展する学問・研究の実態を解説することは並大抵ではなかったし、今すぐにまとめていうことは難しい。講義は別として、100名近くの卒業生に卒論研究・調査を通してどのくらい学問の楽しさ、厳しさがあつたかは卒業生の一人ひとりが努力し、感じたわけである。彼らの胸のうちにあるだろうそれを聞き出して反応を知りたい。が、それは簡単には聞き出せないでいる。埼玉大学に就職した当初、私は助手でありながら、理学博士を所有し、講義でも内容の高い学問を推し進める努力をした。講義、実験も持たされていたからである。私は研究費ゼロに等しい中で調査・研究を持ち出して行っていたのが昨日のように思われる。その中で、学生と山小屋に宿泊し、漁師と飯場で暮らし、鋼鉄運搬船にただで乗せてもらって調査地に向かったり、努力を強要しながら学生を叩き込んだりした。それは教育を越えた研究者要請に似たものかもしれなかった。が、多くの卒業生は、大学、高校、中学校、小学校の教師、地質コンサルタント(株)、博物館等で活躍している。今日では体力的にできないながらも初心貫徹、今年も学生とともに北海道日高山地を調査・研究しているのである。なぜなら科学はロマンで未知の世界が多いから。こうした教育・研究体験

は地質学という学問が野外を中心とした帰納的学問志向から来るものであるから、本質を教えるには彼らに強要しているこうした体験は教師になっても自身の体に刷り込まれているであろう。それは、学校で児童、生徒らに、企業で自身の体験を通して自然観を語ってくれているものと思う。

やっと教授会に入学した当初は、講師であった。木の名札が机に置かれ、座席が指定で明治からの習性のような制度にまた驚いた。さすがそれは今日改められたのは良い。大学は大学人の組織であり、教師、事務員、学生で成立し、学問の追及をする最高研究教育機関である。と同時に、文化を搜索する場でなければならないと思っている。土、日、休日までも謙譲し、研究に没頭してきた私は、雑用で失った多くの時間をいまだに取り戻せていない。研究内容にもよろうが、私の微古生物学研究の総括ができないまま現在に至っており、2年間を埼玉大学総合研究棟で実施させて終了させたいと願っている今日である。真の学問研究とはかくも大変なものであり、それがまた重要な学問の創作、文化を作成していくのであろう。更に研究実績が上がって成功者となって日の目を見ればされに良いのである。

現在まで、在外研究、国際会議、学術調査、海外研究者派遣、海外専門家派遣、海外政府招聘等での海外で過ごしたのは29回、延908日に相当する。この間に海外の多くの研究者、知人、大使等に会い、大学施設、研究所、図書館、博物館、大使館、公使館等訪問、夜会の機会を得たりした。特に大学教授等は学問の専門的知識

* 埼玉大学教育学部理科教育講座

ばかりではなく、さまざまな分野の知識が豊富であり、教養人である。それが彼等の教育の原点でもあることを知る。彼等に習った学生はどんなに幸福であろうか。日本の教授陣も格もそうでありたいと願う。専門を深めなければそうはならない。

私の研究は当初は埼玉県地質図作成の調査・研究に従事した。それは、主に土地分類基本調査で行われ、国土地理院地質調査所（現在の経済産業機構）の図幅等専門的国土開発計画に適用されている。研究成果は多くの学術雑誌に投稿して出版されてきた。地域地質の研究ばかりではなく、その後は1970年度に獲得した理学博士の学位論文で実施した原生動物有孔虫類（微古生物学）の世界的仕事をする中で、学問研究を競うことに重点的研究方針への方向転換を行ったわけである。それは、「プレートテクトニクス理論の背景とその検証」(埼玉大学紀要教育学部(数学・自然科学II)第3巻1号(2004)、23-38頁)の4節で私の微古生物学の趣旨と総括への経過を述べている。現在までに相当数の学術研究を公表してきた。現在、ここでも困ったことが発生した。膨大な研究成果を英文学術書として発表する段階にいたって、米国での出版事情が変化したことである。人生の中で研究期間の終焉に向かっている現在、こうした事情は予想もしていなかったばかりに悪戦苦闘せざるを得ないのである。それにしても、英文での学術書「小笠原諸島の第三紀大型有孔虫類の研究」(日本古生物学会特別出版物第36号、239頁、1996、ISSN 0549 3927)を世界に向けて出版しておいて本当に良かったと思っている。この学術書はピエール・エ・マリー・キュリー大学(パリ第6大学)局の国際的に名高いフランスの微古生物雑誌(Revue de Micropaléontologie, vol. 40, no. 2, p. 207, Chroniques, 1997)に直ちに紹介され高い評価を得ているのである。同時に、私の仮説は検証され、そこに記述した*Paleomiogypsina*属がMiogypsiniidae科の進化系統の最初の属であり、英国学派の研究者等、

インドの研究者等によって、東南アジア、インドからそれぞれ発見されてきている。こうした発見は今後も続くであろうし、私の進化系統の提唱が次第に認められてきているのである。多くの新属の記述をしてきた中の重要課題であるが、未だに追従されていないものもあって、私の研究は今後も継続されなければならない。私の研究は、とてつもなく長い惑星地球の地質時代に世界的に生息した多くの有孔虫類がまだ日の目を見ないで埋もれているのを発見し、世界に向けて知らせ、今日に至った経路、つまり進化の過程、化石帯による地質時代、古環境を解明することである。何時までも実施しているこの研究には終りが無い。これは初めもなかったのであるから、死ぬまで続くのであろう。パリの自然史博物館の入り口に立つブロンズ像はジャン・ラマルクの座像であるが、エンジェルのような娘が父に語りかけている。「お父様の研究は将来にわたって生きている。」と。彼は死ぬまで研究をし、失明後は娘が彼の文章を書き続けていたのである。父子愛の良いお手本として見習いたいものである。

最後にぜひ一つ語らなければならないことがある。それは、埼玉大学理学部に地学科(現在は地球科学科と言うべき)がないことである。文理科学部の改組が原因で無くしてしまったことが悲劇の始まりであった。この間の地学関連を記すならば、遠藤隆二学長は古生代石灰藻類の世界的古生物学の権威者。森川六郎教授は古生代紡錘虫類の同世界的権威者。関陽太郎教授は変成岩の世界的権威者。和達清夫学長は深発性地震研究の世界的権威者で、後に学士院賞を受賞した。それはプレート学説の沈み込み帯の貢献とみられる。私の文理科学部理学科地学の卒業後、戻ってくる場が、教育学部自然科学科地学分野であった。教育学部では、研究費、人員、設備はゼロに等しかった。その中で世界的研究をするには努力しか方法がなかった。この間に、他大学の理学部地学科からの教授招聘が何度かあって誘われた。義父の工学部建設工学科森川

六郎教授の多忙な改革期の評議員中に突然死を眼にした折、私は埼玉大学に定年まで勤め上げることが良いのではなかろうかと考えて現在に至っている。しかし、今この時点で考えたとき、それは正しかったのであろうかと自問すると回答は難しい。研究面では多大な損害が生じてしまった。が、卒業生には恵まれた。最近帰国したばかりのトルコ・イスタンブール大学（1453年オスマントルコ学術・教育研究所創設以来）の施設は、埼玉大学では考えられないほどの先進国なのであり、そこで研究していれば私の成果がもっと早く研究課題の確証を得ていたはずなのではないかと思える。本年1月3日から7日の第94回インド科学者会議の特別招待講演で

は銀メダルを賜った。会場のアンナマライ大学（タミール・ナドゥ州）は327教授、369講義数、9学部、2研究所、1病院を備え、機器も充実し、英語で講義を行っている。すばらしい大学でうらやましい。研究者は自身の境遇で判断するからそう考えるのであるが、本来はそこで仕事をすべきであり努力すべきなのである。これまで行ってきた私の研究結果は将来の研究者が判断してくれるであろう。今後は語る場が狭まるが、友人の誰かが私に語ったことばがある。それを書き、埼玉大学に感謝し、お別れの挨拶としたい。「散るときが浮かぶときなり蓮の花」と。現在も諸法無我である。

Looking back on my university life

Kuniteru MATSUMARU
Prof. Dr. Saitama University

Summary

I have done the science education and science research at the Saitama University for a long time, 37 years. The number of the University Graduate and post-Graduate under my guidance is counted over 100. They are playing an important role as active workers such as elementary school teacher, junior high school teacher, high school teacher, university professor, curator, geo-consulting company, prefectural government officer and enterpriser. My science motivation is mentioned as “study nature, but not teacher”, and “Science is romantic motives” after my lecture on Geosciences. I have researched both local Geology of the Saitama Prefecture in addition to several areas of Japanese Islands, and Micropaleontology, especially on larger benthic Foraminifera. I have researched Geosciences in the Department of Geology, Faculty of Education, Saitama University. Because Saitama University was reformed into 5 Faculties, and Department of Geology, Faculty of Science was re-organized to belong to Faculty of Education. This reform since 1969 did considerable damage to the research of Geosciences, because of great loss of the fundamental support of finance, fellowship and equipment. I would, however, continue to work after retirement to contribute in the field of Geosciences with the great endeavor, just like as Prof. Jan B. Lamarck, because I am the last micropaleontologist in the Saitama University. I could publish many science papers, and when I count only one contribution, the “Tertiary larger Foraminifera (Foraminiferida) from the Ogasawara Islands, Japan”, *Palaeontological Society of Japan, Special Papers* 26: 239 p., 1996, ISSN 0549-3927 will be recognized as a valuable book for larger Foraminifera study. At last I would like to express gratitude for fellows and officers of the Saitama University, and for Graduates and post-Graduates of my class for 37 years.